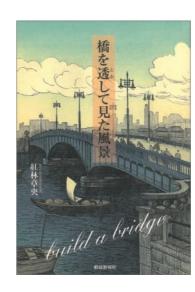


新刊紹介



橋を透して見た風景

著者:紅林章央 発行:(株)都政新報社 仕様:A5判 288ページ 定価: 2,300円(税別)

著者の紅林氏は現役の東京都建設局 橋梁構造専門課長で、奥多摩大橋、多 摩大橋を始め、多くの橋やゆりかもめ、 中央環状品川線の建設に携わってきた という。本書は、『都政新報』誌で 2014~2015年に連載されていたも のを著者が大幅に加筆するとともに貴 重な写真を多数掲載したものである。

徳川家康は江戸に幕府を開府した後 に全国の大名を結集し、一大土木事業 を展開した。人の手で大地を崩し、海 を埋め立て、湿地を干拓した。そして、 尾根筋、洲、崖地、湧水など土地の豊 かなポテンシャルを見極めながら、濠、 道、水道、湊、街区などのインフラが 次々とつくられていった。その中のひ とつに橋がある。

本書では江戸時代から現代までの一 橋一橋に焦点を当て、東京の橋の成り 立ちから特色、当時の技術者らの情熱 や仕事ぶりや震災復興橋梁からの正確 な建設経緯についてわかりやすく書か

例えば▽江戸時代の橋の管理はどう であったか▽文明開化の頃に架けられ た石橋やお雇い外国人による西洋式木 橋とは▽永代橋や清洲橋はなぜあの形 になったのか▽太平洋戦争で橋はどん な影響を受けたのか▽戦後、橋梁建設 はどう再開され、技術を進歩させたの か――等。

また、扉の口絵16ページを始め随 所に貴重な写真が多数掲載されている。 橋に興味のない方も本書を読んでみる と橋に魅入られるかもしれない。ぜひ 手にとって一読してはどうだろうか。 本書の構成は次のとおりである。

はじめに

1章 江戸時代の橋

2章 明治・大正の橋

3章 関東大震災

4章 昭和から太平洋戦争

5章 終戦から現代

終わりに

ACe 建設業界 2016.11 **50**